海を渡れない人

—— 小田嶽夫「望郷」を中心に

Liting LIN (林麗婷: International Research Fellow,

Japan Society for the Promotion of Science)

✉ aiaaia111@gmail.com

(日本) 日本学術振興会外国人特別研究員、神戸大学招へい外国人研究者。20世紀日中知識人の移動・留学と文学。『中日近代文学における留学生表象——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——』(大阪: 日中言語文化出版社, 2019)、『攪乱されるジェンダー: 潘柳黛『退職夫人自伝』試論』(西宮: 『野草』第104号, 2020)、『想像としての纏足——凌叔華『千代子』を読む——』(大阪: 『論潮』第12号, 2019) など。

Those Who Cannot Find Their Way Home

: Focus on Takeo ODA's *Bokyo*

This paper discusses Takeo Oda's novella *Bokyo* (『望郷』), which is about Keirin Ko (黄景林), a half-Chinese, half-Japanese intellectual living in Japan and seeking to return to his hometown, Hangzhou (杭州), after World War II. First, this paper surveys news and reports about the problems of overseas Chinese going back to China, a theme which is central to *Bokyo*, in this way conveying the dilemma of overseas Chinese who face the problem of what constitutes a "hometown". Second, it analyzes the protagonist of *Bokyo*, and argues that Keirin Ko's experience is similar to that of Jingsun Tao (陶晶孫), a Chinese intellectual who escaped to Japan after a stay in Taiwan. However, this study indicates that having a Japanese mother complicates Keirin Ko's national identity. Third, the paper considers changes in the image of West Lake (西湖), especially its connection with Manshu SU (蘇曼殊), which are highlighted in *Bokyo*, and concludes that West Lake represents a spiritual base of diaspora intellectuals who are removed from their motherland.

Keywords Takeo Oda (小田嶽夫), *Bokyo* (望郷), Overseas Chinese in Japan (在日華僑), Jingsun Tao (陶晶孫), West Lake (西湖)

1 はじめに

小田嶽夫(1900~1979)は外務省書記員として1924年に杭州に赴き、現地に4年間滞在したのをきっかけに、生涯中国を素材に創作し続けた。第3回芥川龍之介賞受賞作「城外」(1936)は、杭州領事館に書記生として赴任した重藤陽一が自分より7歳上の中国人の女中と「秘密の関係」を持つ話だが、それより前にも短編小説「支那学士蔡萬秋」を『新潮』9月号(1934)に発表している。この小説は、留学を終え日本人女性の妻を連れて杭州で職についた「蔡萬秋」が目下の北伐軍が引き起した騒乱を「同胞のエゴイズム」によったものだと考え落胆した、という話である。小田が体験した中国の社会運動に取材した作品だが、「蔡萬秋」という名前は実在の留日経験者、小田とも交遊があった作家・政治家の崔萬秋¹に因んで作った名前と考えられ、小田は戦前から小説の形で中国知識人のあり方を表現していたことが確認できる。

小田は東京外国語大学中国語学科の出身で、早い時期から中国現代文学と関わり始めた。1932年、郁達夫の短編小説を7つ選んで翻訳し、『過去』というタイトルで春陽堂から出版している。1936年の郁達夫の来日の際、小田は東京駅まで出迎え、郁と郭沫若との10年ぶりの再会にも同席した²。1937年、小田は創造社が出版する『大魯迅全集』の『兩地書』の翻訳を担当した。また、上海に渡り、魯迅の未亡人許広平、及び魯迅の弟子である蕭軍、蕭紅、胡風に会い、『同行者 支那現代小説三人傑作品集』(1938)を翻訳する契機となった。1939年、北京・満洲へ旅行し、北京で周作人・錢稻孫に会った。『北京飄々』(1940)、『魯迅伝』(1941)、『郁達夫伝——その詩と愛と日本』(1975)など、小説や伝記を通して、小田は現代中国の知識人のあり方を表現し続けたのである³。

1956年、小田は中国文化訪問団の一員として中国を訪れ、28年ぶりに杭州を再訪することができた。その経験をもとに、中編小説「望郷」(小説集『望郷』に収録、学習研究社、1964)を執筆した。本稿ではこの「望郷」を取り上げて、小田の中国知識人のあり方を表現する方法を考察する。まずは小説の梗概を紹介しておこう。

戦時下日本に亡命し、戦後も日本に居続ける黄景林(父が中国人、母が日本人)は訪日公演中の梅蘭芳の京劇を鑑賞し、久しぶりに故国の雰囲気満喫できた。会場で旧友の牧山桂太と偶然出会い、彼から近いうちに「中共」へ旅行すると伝えられた。景林は両親について思い出し、自分の日本にきた経緯を振り返る。記憶の中の西湖を懐かしむ中、中国から帰ってきた桂太から現在の西湖について話を聞き、懷郷病に陥る。日本留学中に父に死なれ景林がひとりで西湖を散策したことや、のちに妻になる汪露及びその弟と一緒に西湖を遊覧したことが語られる。そして話が現在に戻り、家族で仲良く暮らして

1 小田嶽夫と崔萬秋の交遊については、崔萬秋「東京交遊記」(『新時代月刊』第4巻第4,5合併号, 1933.5, pp.37-40)及び小田嶽夫「抗日支那の作家・知識階級人」(『文藝春秋』8月号, 1937.8, pp.64-65)に記されている。

2 小田嶽夫『文学青春群像』(南北社, 1964), pp.199-207.

3 小田嶽夫の経歴について、小田嶽夫『三笠山の月 小田嶽夫作品集』(小沢書店, 2000)の「年譜」(pp.377-382)を参照した。

つも、日本人女性と結婚し日本の生活にすっかり馴染んでいる息子との間に距離を覚える。そこで懷郷病を快癒させるため、囲碁に力を注ぐようになる。碁会所で知り合った老人から、戦争で息子二人を亡くしたこと、そしていつか中国へ渡り息子が息を引き取った場所を見てみたいという希望を聞いて衝撃を覚えた。西湖に帰る夢から目が覚めるところで物語は閉じられる。

「望郷」に関する先行研究は少ないが、国松昭は主人公について「中国と日本の間で怒り悩みつつも流されていく一つの運命をよく造形しえたといえる」と述べた上で、「小田は、この景林を通してこそ彼の若き日からの様々な中国及び、杭州、西湖への思いを彼自身の歴史に即して全体的に述べることができた」⁴と評価した。しかし、小田は具体的にどのような「思い」を述べたのかは明確にされていない。また、小田は確かに生涯西湖を描き続けたが、「望郷」における西湖がどのような変貌を遂げたのかを詳しく考察する必要がある。

魯迅や郁達夫、郭沫若、周作人など、小田は現代中国の知識人が抱える悩み、アイデンティティの問題に強く関心を寄せている作家であり、「望郷」にも同じような問題意識が読み取れる。本稿では、戦後華僑知識人の帰国問題を踏まえ、「望郷」の社会的背景を明らかにした上で、主人公の設定が持つ意味を論じたい。また、「望郷」に描かれた西湖の表象の分析を通して、支那趣味を超える小田の書き方を明らかにする。特に、蘇曼殊についての語りを通して、小田の中国・日本の境でさまよう現代知識人を描く方法について考える。

2 「望郷」の背景——戦後華僑の帰国問題

「望郷」では、中国大陆にルーツを持つ主人公黄景林は、西湖を訪れることを望みながらも簡単には大陸に帰れないとされている。これは当時の社会の現実をある程度反映していると考えられる。

1945年の日本の敗戦に伴い、外地(満洲・上海・台湾・朝鮮など)にいた日本人の引揚が行われ、その総数は650万人にも及んだ⁵。それと相まって、日本に居住している華僑や留学生の自国への帰還も行われるようになる。1946年、在日の華僑や留学生による留日華僑総会(日本華僑華人聯合総会前身)が成立し、以来、会報『東京華僑会報』(以下では『会報』と略する)を発行し続けてきた。本稿では『会報』に視点を据えながら戦後華僑の帰国問題を整理してみたい。

華僑の帰国はふたつの形式があり、ひとつは自費で帰国するもの、もうひとつは集団帰国というものである。いずれも華僑総会へ書類(帰国者生活調査書及び帰国者申請

⁴ 国松昭『「望郷」』(『国文学解釈と鑑賞』第64巻第4号, 1994.4), p.54.

⁵ 浅野豊美『帝国日本の植民地法制——法域統合と帝国秩序』(名古屋大学出版会, 2008), p.568.

書)を提出する。帰国の流れは、「華僑総会ではこれらの書類をまとめて、北京の帰国華僑聯誼会に送り、国内の同意を求めます。従つて同意が来れば、帰国する方法として本人の都合により、早く帰りたい者は天津か上海直行或いは香港経由の貿易船を接渡し帰るか或いは次の集団帰国があるまで待機する」⁶というものであった。ここからわかるように、帰国の条件を満たすか否かは、大陸側の判断に委ねられる。「望郷」では、「その翌年には中国の支配者は国民党の蒋介石から共産党の毛沢東に変わったが、帰国すれば戦争犯罪人にされるといふ点では同じことなので、彼は日本にとどまった」⁷(p.24)というのは景林の戦時下における対日協力的な行動が糾弾されることを恐れたものだ。

また、仮に大陸側に帰国の許可を得られても、華僑たちは必ずしも順調に帰れるわけではないようだ。その原因は主にふたつ考えられる。ひとつは、東西冷戦構造に組み込まれた日本・中国・台湾の関係に由来する。安井三吉は次のように述べている。

日本華僑にとって大きな問題は、他の地域の華僑と同様、戦後中国が、国民党と共産党の内戦に突入し、一九四九年一〇月、中華人民共和国が建国され、他方国民党が台湾に逃れ、一方をソ連が、他方をアメリカが支援するという東西冷戦の構造に組み込まれたことによって起こった⁸。

特に、1952年、日本政府が台湾の蒋介石政府と日華平和条約を調印したことは重要だ。華僑の中国大陆への帰還は「中国の新政府を擁護することになる」ため、蒋介石政府はそれを阻止しようとし、陰に陽に日本政府に圧力をかけたと言及されてきた⁹。『会報』でも、華僑が乗船しようとするときに日本政府に抑留されたという記事が何度か掲載された¹⁰。もちろん、留日華僑総会は中華人民共和国を擁護する団体なので、蒋介石政府に反対する立場を取ってきた。しかしいずれにせよ、政治問題によって華僑の帰国に支障を来したのは事実には違いない。『会報』においては、「祖国への自由渡航望む」¹¹という呼びかけがしばしばあった。

もうひとつは、戦後の華僑にとって帰国を考えると精神的な不安と葛藤がつきまとう、というものだ。即ち、故郷は何処にあるのかという問題である。一口に華僑といっても、ルーツや世代など、個人差があるのはいうまでもない。作家陳舜臣(1924~2015)は、晩年のエッセーで戦後に直面した帰郷の問題について、次のように心境を綴っている。

6 無署名「帰国希望者は早目に手続きを——帰国問題について——」(『東京華僑会報』第50号, 1956.6.10), 1面。

7 本文引用は小田嶽夫『望郷』(学習研究社, 1964)による。以下は頁数のみ示す。

8 安井三吉『帝国日本と華僑——日本・台湾・朝鮮』(青木書店, 2005), p.277。

9 大類善啓『ある華僑の戦後日中関係史——日中交流のはざまに生きた韓慶愈』(明石書店, 2014), p.98。

10 無署名「理不尽な日本政府 洪進山ら五名を不法抑留 華僑総会声明を発表」(『東京華僑会報』第43号, 1955.11.25), 1面。

11 潘日榜「祖国への自由渡航望む」(『東京華僑会報』第31号, 1954.10.25), 1面。

帰郷することにきめたというが、私は神戸生まれなので、故郷がどこかときか
れると、いささか考えこんでしまう。私に限らず都会生まれの子は、同じような問
題をもっているだろう。(略)

たいていの人は、もう神戸を故郷と思い定めている。じつは私たちもほぼ同じ
状態であったが、ただもう一つの故郷が、たいへん遠いということがちがってい
た。これは距離的に遠いというだけでなく、「異郷」といってよいほど質的な距たり
が大きい¹²。

神戸生まれであるのに、神戸とは違うもう一つの故郷が近いような遠いようなところ
にあるという定めない感覚。このような感覚は陳舜臣の生涯を貫いたのだ。陳が生涯
三度も国籍を変えた(変えさせられた)ことは、人のナショナル・アイデンティティの不
安定さを端的に示したものだ。

もう一人、例を挙げよう。東京生まれの凌星光(1933~)は1953年、一橋大学を中退し
中国に帰った。しかし、彼の家族の間で国民党を支持した父と共産党を支持した母が対
立し、家族の関係はつい破綻したという¹³。また、時代は下がるが、戦後生まれの華僑
二世陳天璽(1971~)は、誕生の翌年の中日国交正常化に伴い、それまで保有していた両親
の中華民国の国籍が日本で認められなくなり「無国籍」になった。陳は「無国籍」であるた
め台湾へ入るのを拒否されたり、また日本へ帰るのも断られたりなどの様々な理不尽な
経験をし、自伝の中でナショナル・アイデンティティに由来する苦痛を訴えている¹⁴。

以上のように、戦後の東西冷戦構造に組み込まれた日本・中国・台湾の関係の下で、
華僑の帰国が困難な状況に置かれたことを明らかにした。さらに、華僑にとって何処へ
帰るべきかを考えることは精神的苦痛や葛藤が生じる過程でもあり、帰国問題は一層複
雑な様相を呈している。

「望郷」では、景林は新しい中国に対して、次のような考え方を示している。

全体主義的な政治体制については彼は好感を持ち得なかったが、併し中国を立て
直すためには、この方法以外には無いとも考えられた。それでいて、その体制のな
かで生活することは、よしんば戦犯の問題が無かった場合でも彼は或いは拒否した
かもしれない。(p.25)

景林は自分のかつての対日協力の行動に負い目を感じていると同時に、中華人民共和
国に抵抗感を持っていることが描かれている。「望郷」は当時の華僑の帰国問題をリアル
に反映し、華僑の悩みを活写しているのである。次の節では、「望郷」の人物設定につい

¹² 陳舜臣『道半ば』(集英社, 2003), pp.159-161.

¹³ 大類善啓『ある華僑の戦後日中間係史——日中交流のはざまに生きた韓慶愈』(明石書店, 2014), pp.85-94.
凌星光は中国で大学を卒業し、河北大学日本語科教師、中国社会科学院先進国経済研究室主任を歴任した。
1990年来日、金沢大学・福井県立大学で教鞭をとり、2003年に福井県立大学名誉教授となった。

¹⁴ 陳天璽『無国籍』(新潮社, 2005), pp.7-12.

てもうすこし詳しく見ていく。

3 海を渡れない人——黄景林のアイデンティティ

「望郷」では、小説内時間は明記されていないものの、冒頭でふたつの出来事が描かれている。ひとつは景林が梅蘭芳の京劇公演を鑑賞したこと、もうひとつは会場で旧友牧山桂太と再会し、桂太が近いうち中国に行くと言ったことである。梅蘭芳を団長とする中国京劇団は1956年5月26日に来日し、7月12日に最後の東京公演が行われた¹⁵。そして、桂太については、「杭州領事館の書記生として3、4年杭州にいて、桂太が日本へ帰ったのは昭和2、3年」(p.11)で、のち外務省をやめて小説を書いているとされ、小田が自分の経験を桂太に投影していることがわかる。すでに触れたが、小田は梅蘭芳来日と同じ1956年に中国を訪問した。小田は梅蘭芳の来日と自分の訪中のことを小説に採り入れながら「望郷」を創作したのである。

「望郷」は7節からなるが、桂太が登場するのは「一」と「四」である。「一」では桂太との再会が語られ、「四」では桂太に中国での見聞を聞く。特に、二人にとって最大の関心事——西湖の現在の様子——について語り合う。桂太は中国から帰ってきて、「いや、変わっていません、変わっていません」と「顔には満足気な微笑がただよって」、景林に西湖の様子を伝えている。桂太は次のように言う。

「全体主義国家、統制の行きわたった国家の常で、国家全般、生活全般にどこか味気ない点のあるのは事実ですが、併し国民が希望に燃え、昔のような頹廢が影をひそめたことも事実です。(略)併し中国人そのものはなかなか魅力があります。誠実で、礼儀ぶかく、客扱いに神経の行きとどいたところ、やはり老大人人の立派さがあります……」(p.30)

このように、桂太は新しい中国に異議を申し立てながらも、中国人に親しみを示している。これはある程度作家本人の考えを反映しているだろう。

ただ、桂太の登場は2回のみで、物語は主に景林の現実と過去を交差させながら進む。景林は日清戦争前(文脈から1890年と推定される)に長崎で生まれた。父は中国人の商人黄昭月で、母は一度結婚したが夫に先立たれた日本人女性小磯みどりである。近代において留学生が日本に来るまで、日本で活動する中国人のほとんどは貿易に従事する商人だった。中国人商人の男性と日本人女性との結婚はありうる話だ。実際、清末~民国初期の文人、蘇曼殊はそのような家庭に生まれた。現代中国の作家、張資平の短編小説「她悵望着祖国的天野」(彼女は祖国の彼方を侘びしく眺める)(1922)においても、中国人商人を父、日本人女性を母に持つ少女秋児が登場している。

¹⁵ 無署名「最後の東京公演決る」(『東京華僑会報』第50号、1956.6.10)、1面。

景林は幼い頃中国に戻り、幼少期は杭州で過ごしていた。そして日本へ留学し医学を修めたあと、中国人女性汪露と結婚し、杭州で開業医を営む。日中戦争勃発後も相変わらず日本人と付き合うことで同胞から白眼視されたのをきっかけに、彼は汪兆銘政権下の「東京の中国留学生会館の監督」になり、一家を挙げて渡日する。二人の息子は日本の大学の医学部に進学する。日本敗戦後、景林はかつて汪兆銘政権に協力したことを糾弾されるのを恐れ、日本に残ることにした。息子たちは順調に日本の病院に就職し、長男は日本人女性と結婚した。しかし、1950年に汪露が他界した後は、景林は日々故郷への思慕が募る一方だった。

第2節では、「望郷」は戦後華僑の実態を反映していると指摘したが、景林の人物設定を整理すると、中国現代作家、文学団体創造社のメンバーのひとり、陶晶孫(1897~1952)が浮かび上がってくる。

陶晶孫は混血児ではないものの、1906年一家で東京へ移住し、東京錦華小学校、東京府立第一中学校、第一高等学校を経て、九州帝国大学医学部に進学した。卒業後、東北帝国大学理学部や医学部で研究を行う。日本人女性、佐藤みさを(1899~1993)と結婚し、3人の息子をもうけた。1931年、上海自然科学所の研究員となる。日中戦争勃発後、陶は上海にとどまり、日本側の対中文化政策への参加を求められ1944年第3回大東亜文学者大会への出席を余儀なくされた。戦後一度台湾へ渡り台湾大学の教授に就任したが、台湾の情勢が厳しくなるなか、1950年に妻と末児を連れて日本に逃れ千葉県市川に落ち着いた。医学の研究を進め、千葉大学で博士号を授与された。その後東京大学文学部で非常勤講師を務めるなど、日本の知識人と交遊した¹⁶。1952年に亡くなった後、遺稿集として『日本への遺書』が出版され、日本で大きな反響を呼んだ¹⁷。

日本、上海、台湾、日本と、陶晶孫は生涯転々としながら居場所を求めてきた。特に戦時下は不本意ながら対日協力の行動をしたため憂鬱な日々を送ったことが、先行研究で指摘されている¹⁸。小田が直接陶晶孫について語っている文章は見当たらないものの、彼は創造社のメンバーに対し多大な関心を持っていた。戦後日本に來た陶晶孫を知らなかったという可能性は低いだろう。実際、世代が近い、生涯医学に従事した、戦時下対日協力の行動をした、息子も医学を勉強している、戦後に日本にいる、など、「望郷」の景林は陶晶孫と多くのところで重なっている。

ただ、陶晶孫とは異なり、景林は混血児という設定である。「日本人の血を受けていることから来る心やましい気持ちとそれをひそかに誇りに思う気持ちとが、いつも彼の体内でせめぎ合っていた」(p.21)とあるように、小田は混血児の設定を用いて、景林の

¹⁶ 1951年、日本の知識人と陶晶孫との座談会が開かれ、佐藤春夫、奥野信太郎、竹内好、丸岡明が出席し、中国文学の交流や中国の読者層、作家の生活などについて語り合った。陶晶孫ほか「陶晶孫氏を囲む座談会」(『三田文学』第41巻第3号、1951.7)、pp.58-71。

¹⁷ 『日本への遺書』は1952年(東京：創元社)に出版された後、1963年に出版元を東京の普通社に換え再版された。1995年には戦後50年記念企画として初版を底本に、東京の東方書店から出版された。

¹⁸ 中村みどり「戦時における日中研究者のつながり——松枝茂夫宛陶晶孫関連書簡二通について」(『文化論集』第55号、2019.9)、p.248。

アイデンティティにおける揺らぎを際立たせようとする。

小田の中日混血児への関心は戦時下の小説『北京飄々』からも窺われる。中国山西省で出会った「東光」という名前の混血児の赤ん坊について、語り手の「わたし」は次のような感想を漏らした。

私にはこの子供の将来のことが妙に気になった。この子供は支那人である、けれども単なる支那人ではない、支那人である以上に東洋人なのだ。して見ればその時々東洋の空気如何に依つてこの子供の心理もさまざまに複雑に変転するわけだ。東亜の新秩序と言つてもその秩序の旨く行つてゐる間はいいとして、それが旨く行かなくなつた場合には支那人は支那人として、日本人は日本人として、互にその国家人としての限界性を固守することになるが、彼の場合にはその固守すべきものが無い。彼は依然として東洋人以外ではあり得ないのだ¹⁹。

日中戦争期、混血児は帝国日本と植民地との融合の象徴として表象されたことは先行研究で指摘されてきた²⁰。佐藤春夫「アジアの子」はその典型的な作品として挙げられよう²¹。小田は混血児のアイデンティティを「東洋人」と規定した。「東洋人」という呼称の出自ははっきりしないが、「西洋」に対抗する発想である。岡倉天心『東洋の理想』の冒頭の「アジアは一つである」²²という名言がのちにファシズムの宣伝に利用されたように、陶晶孫より1年前、1943年第2回大東亜文学者大会に参加した小田が戦時下、帝国日本の政策に協力したのは事実である²³。しかしながら、小田は「東亜の新秩序」がうまくいっているときはさておき、うまく行かなくなつたとき＝敗戦となつたときの、帝国日本の思想統制に利用された混血児の運命を案じている。それは『北京飄々』に素直に書いていることである。

一方、戦後に著された「望郷」は同じく混血児の運命を描くものの、景林の戦後の抛り所のなさを表現している。小田の混血児に対する理解が変わつたのである。次節では西湖を表象することで混血児景林を描く小田の書き方を考察する。

19 小田嶽夫『北京飄々』(東京：竹村書房、1940)、p.221。小田は晩年、『北京飄々』を「作品としては著者の作品群から抹殺することにする」と述べている。小田嶽夫『漂泊の中国作家』(現代書房、1965)、p.284。

20 星名宏修『植民地を読む——「贗」日本人たちの肖像』(法政大学出版会、2016)、pp.101-130。

21 「アジアの子」について、論者は別稿で考察した。林麗婷『中日近代文学における留学生表象——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——』(日中言語文化出版社、2019)、pp.98-120。

22 Kakuzo Okakura, *The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan* (London: John Murray, 1903). p.1.

23 小田嶽夫はエッセー「中国文学者との会合」(『新文化』10月号、1943.10、pp.24-25)で、第2回大東亜文学者大会に参加した様子、特に中国から来た文学者との交流を記した。

4 変容しつつある西湖

では、景林の精神的な拠り所は何処にあるのか。「望郷」では、景林は日本にいらながら、西湖に対する思慕が日々募っているとされる。作品では、西湖についての叙述に紙幅の多くを割いているが、注目すべきことは物語の進行に従って西湖のあり方が変容しつつあることだ。まず、「三」では、小瀛洲、白堤、蘇堤、孤山、岳王廟など西湖の有名なスポットをひとつおとり語り、景林にとって西湖は「美女のようなたおやかな、慈母のようにやさしくあたたかい」存在として提示された。そして「四」では桂太から西湖の現状を聞き、「景林は思わず息を呑んだ。別れた昔のなつかしい恋人の、今も変わらぬ美しさを聞く思いで、うれしさ、なつかしさのためにしばらくは言葉も出なかった」(p.29)と変わらぬ西湖に安堵感を覚えた。

景林は桂太から聞いた話を息子に聞かせたところ、息子は西湖の美は「女性的」だとし、「中国的な美しさと言えば、僕はやっぱり北京の町を挙げたいですね」と答えた。息子は西湖と北京を対置させ、西湖＝女性的、北京＝男性的という構図を立ち上げた。西湖が女性的であるというより、西湖に亡き母や亡き妻の面影を重ねる景林が西湖に求めようとしたのが「女性的」なものである、というべきだろう。つまり、景林の西湖への眼差しはジェンダー化された中国への眼差しなのである。息子の言葉に景林は不愉快になり、自分と息子との距離を感じざるを得なかった。

「五」では再び西湖についての記憶が語られるが、今度は景林が大学時代、父の葬式を終えた後に一人で西湖へ行き舟を出したことが語られる。西湖を散策中、景林は蘇曼殊の墓をみつけた。「それよりも曼殊の墓がそこにあることに、彼は深い感動を覚えた」(p.37)。景林はかつて曼殊の自伝的小説『断鴻零雁記』を読んだ。景林と似たような出自——父が中国人、母が日本人——を持つ三郎が乳母から生母の話を聞いて中国の広東から遙々逗子の桜山まで生母に会いに行ったという内容のその小説を、景林は「胸をふるわせながら」読んだ。三郎の生母への愛に感動した景林は、ふと曼殊のもう一つの文章「嗚呼広東人」を思い出した。それは、広東人は国家観念が希薄で利益ばかりを考えると、「ああ、若し中国が亡びるとすれば、此の広東人の手で亡ぼされるであろう云々」(p.38)と広東人の愛国心のなさを批判しているものである。景林は「曼殊は何という愛国者なんだろう」(p.38)と感嘆した。そして、「自分はどうなのだろう」と考えずにいられなくなった。

「曼殊ほどではないかも知れないが、そして行動力には乏しいかも知れないが、中国を愛する心情では、自分は人後に落ちないつもりだ……眉間をかすかにそばだてながら、彼は自身にそう言い聞かせた」(p.38)と景林は自分の愛国心を主張したものの、「けれども一瞬後には、その顔は憂いに閉ざされた表情に変わった」とあるように、景林は曼殊に触発されて自分のアイデンティティを考えようとするが、中国の政局を思い出すといらだちを覚える。いずれにせよ、ここでは西湖は、曼殊が眠り混血児のアイデン

ティティに思いを巡らせる場所として語られる。

景林の懷郷病は「ひまのある度に中国書売る店へ出かけて、西湖についての文章のある書物を買求め、夢中になって読みふけた。何度も何度もねぶるように読み、しかもそのあとでは必ず、ノートに書き写した。それだけではまだ足りず、しまいには神田の古書街を廻り歩いて、芥川の『支那遊記』その他の日本の現代作家のものにまで手を伸ばすほどにも病は昂じた」(p.45)というように進行していった。書物から西湖の面影を探す行為は、故郷の「幻想性」を物語っている²⁴。

では、一体西湖はどのような場所なのだろうか。「七」では、物語のクライマックスを迎える。景林は基会所で知り合った老人(白頭氏という)に、自分の息子二人は戦時下の中国で命を落としたと告白された。一人は山西省で戦死し、もう一人は杭州で病死したということであった。白頭氏は次のように訴えている。

私ア是非一度子供たちの死んだ場所へ行って来たいのです、それが今の日中関係では出来ません、国交が回復して自由に往来出来るようになれば、私ア旅費のことなんかどんな工夫をしても行って来るつもりなんですが……(p.57)

ここでは、杭州(西湖)は日本人の兵士がなくなった地として語られている。母・恋人を懐かしむ地から、アイデンティティに思いを巡らせる地、さらに日中戦争の記憶が刻まれ、日中両国の人々の思いが交差する地へというように、重層的な西湖像が立ち上がる。

5 方法としての蘇曼殊——「望郷」の射程

小田が蘇曼殊を引き合いに出して景林のアイデンティティを語ったのは上述の通りだ。では、なぜ小田は蘇曼殊を選んだのか。この問題について中国知識人、特に陶晶孫と蘇曼殊の関わりについてもうすこし考察してみる。

蘇曼殊は1918年病没、1924年、陳去病や柳詠子ら友人によって西湖の孤山北麓に墓が立った。その後『蘇曼殊年譜及其他』(1927)、『曼殊逸著兩種』(1927)、『曼殊全集』(1928)が相次いで刊行されるなど、中国文壇で小さな曼殊ブームが起こったが、時期はちょうど小田巖夫の杭州滞在に重なった。創造社の人たちも曼殊に言及し続けた。張定璜はかつて曼殊の著した『文学因縁』に感銘を受けたことを述べ、中国にバイロンを紹介した曼殊の功績は並々ならぬものと評価した²⁵。郁達夫は曼殊について、「彼の訳詩は自作

²⁴ 伊豫谷登士翁は「戻るべき場所への帰郷という物語は、しばしば幻想であった」と指摘している。伊豫谷登士翁・平田由美『「帰郷」の物語/「移動」の語り：戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』(平凡社、2014)、p.15。

²⁵ 張定璜「Shelley」(『創造』第1巻第4期、1923.2)、p.1。

の詩よりよく、彼の詩は彼の絵よりよく、彼の絵は彼の小説よりよく、そして彼のロマンティックな気質、またこのロマンティックな気質に由来した行動の風格が、彼の持つほかのどんな特徴よりもよい」²⁶といい、曼殊の文学は高く評価しなかったものの、曼殊のロマンティックな精神を肯定した。

しかしながら、創造社で最も曼殊のことに関心を寄せたのはやはり陶晶孫である。1934年に『同仁』に発表した「蘇曼殊と逗子」をはじめとし、戦時下の1944年に出版した日本語の文集『陶晶孫日本文集』においても、陶晶孫は「曼殊雑談」、「曼殊書信集に見える彼の健康に就いて」、「曼殊書信集に見えるその経済状態」、「蘇曼殊愛用の拓本」、「蘇曼殊の再登場と漢文」、「蘇曼殊と逗子」²⁷などの曼殊に関わる文章を書き残している。それとは別に、同じ1944年に上海で出版された陶晶孫の中国語の文集『牛骨集』には、「急忙談三句曼殊」(取り急ぎ語る、曼殊について二、三の事柄)という文章が収録されている。内容の一部は「曼殊雑談」と重なるものの、特筆すべきは曼殊の文学の意味を論じている点だ。陶晶孫は曼殊の創作が旧文学として扱われることに不満を覚え、次のように述べている。

これら上品な知識人たちが五四運動を起こす以前に、古い形式で中国近代のロマン主義文芸を開拓した者は、ほかでもない曼殊であった。曼殊の文芸は、大きなスパンを跳躍し、創造社のロマン主義運動につながったのである²⁸。

陶晶孫は郁達夫よりも曼殊の文学の価値を評価している。そして現在の学界で曼殊を論じる際には、しばしば陶の評価を援用しつつ行うことから、陶の指摘が妥当だったことがわかるのである。

また、日本語のエッセー「曼殊雑談」は『日本への遺書』に再録されている。陶晶孫はここで、曼殊の日本留学や留学生が起こした当時の革命運動を踏まえ曼殊の生活振りを語り、医師としての視点から彼の健康と死を分析している。特に、曼殊の国籍問題を陶晶孫は次のように記している。

即ち彼は完全な日本人にしろ何にしろ一個の中国人である。と云うのは彼の性格、彼の行動は遂に中国人である。永く欧洲にいた人や永く日本にいた人はみなその国の影響を多分に受けている。殊に幼年時代に於いて甚だしい。私はそれを経験している。だから幼年時代に中国に来たもの、そして日本留学生として日本に行き、河合夫人の下にて日本人に戻る工作をしないでいて中国留学生の仲間に居た曼殊は遂に中国的性格の持ち主になった²⁹。

²⁶ 郁達夫「雑談曼殊的作品」(『洪水』第3巻第31期、1927.4)、p.285。『洪水』第3巻第31期の奥づけには1927年4月とあるが、「雑談曼殊的作品」の最後に執筆時期を「1927年5月30日」と記していることから、雑誌の出版時期は1927年6月以降と推測できる。

²⁷ 陶晶孫『陶晶孫日本文集』(上海：華中鉄道総裁室弘報室、1944)、pp.77-122。

²⁸ 陶晶孫『牛骨集』(上海：太平書局、1944)、p.81。原文は中国語、論者が日本語に訳出した。

陶晶孫は、曼殊は幼年時代を中国で過ごしたため中国人のアイデンティティを形成していったと論じている。また「私はそれを経験している」とあるように、陶晶孫は自身のことに思い至る。日本人の血はないものの青年期まで日本で過ごした陶は、自分の日本的性格を説明しているのである。陶晶孫は曼殊を語りながら同時に自分のことを語っている。陶晶孫が曼殊に心を寄せたのは、曼殊の現代中国文学史におけるパイオニア的な地位からのみならず、曼殊の混血児としての出自、アイデンティティに伴う苦痛に対する深い感銘からでもある。

このように陶晶孫は曼殊のことを胸に刻むが、『日本への遺書』に序文を寄せた内山完造は、次のように記している。

数奇の詩僧蘇曼殊を私に教えて呉れた人は魯迅先生であるが、曼殊和尚の西湖畔の墳墓や日本に於ける幾多の事跡については尤も多く陶先生から教えて貰った。陶先生が曼殊の話をして呉れて居ると、時には私は先生を曼殊和尚と錯覚することさえあった。恐らくは二人の間には豊かに相通じるものがあつたのであらうとも思うて居る³⁰。

内山完造は陶晶孫から蘇曼殊の話を多く聞いたことを述べ、陶晶孫と蘇曼殊との精神的な同一性を指摘している。陶晶孫と蘇曼殊、ふたりとも日本に対して深い葛藤を持っている。それは『望郷』の景林とも共通している。小田が曼殊の話を組み入れて現代中国の知識人のアイデンティティを語ることは極めて自然で、また有効な方法だろう。陶晶孫が曼殊を引き合いに出して自身のアイデンティティを語るように、小田もまた曼殊をひとつの方法として用い中日混血児の精神的葛藤を表現し、中国知識人の心象風景を描いている。

小田は現代中国の知識人を描き続け、一貫して彼らの「漂泊」のありかたに関心を抱いている。「望郷」の翌年に執筆した『漂泊の中国作家』において、彼は次のように綴る。

郁が今日生きていて、この中華人民共和国にいたとしても、政治に興味を持たず、又イデオロギッシュの小説を好まない彼であって見れば、おそらくどこか適当な閑職の位置で、ひそやかに生きていることであろう。そしてそれはそれで自然なことなので彼がこの国に生きていさえすれば私にはそれほど深い感慨は無かったかも知れないが、郭が天安門樓上に赫赫と輝いているのに比して、彼があまりにも悲惨な最期をとげている——そしてそれが日本の侵略主義に基因していることを思うと、私の心は茫洋とした悲しみの海へ、さ迷い出さずにはいられないのであった³¹。

29 陶晶孫『日本への遺書』(創元社、1952)、p.193.

30 内山完造「寒山詩の味」(『日本への遺書』所収、創元社)、pp.10-11.

31 小田巖夫『漂泊の中国作家』(現代書房、1965)、pp.6-7.

天安門の楼上に立ち、表舞台で活躍している郭沫若の姿を見ると、小田はスマトラで日本軍に殺された郁達夫のことを思い出し、悲しみに浸る。この気持ちは後の『郁達夫伝——その詩と愛と日本』の執筆へつながったのだ。また、小田は晩年、最後の小説である「三笠山の月——長安の阿部仲麻呂」(1979)で帰郷を望みながら奈良へ帰れない阿部仲麻呂のことを描き、「異邦人」のことを考え続けたのである。

6 おわりに

1957年、小田は『新日本文学』にエッセー「杭州彷徨」を発表した。その冒頭に「私は胸の鼓動をおさえるようにしながら」、「ああとうとう来た」と書き綴るように、小田は28年ぶりの西湖への再訪に喜びを禁じ得なかった。また、エッセーの最後には、西湖で舟遊びをしながら「ああ、これはゆめではないのか」と嘆じ、「指を水の中へ差し入れ」て「やわらかく、あたたかく、何やらくすぐるような感じ」³²を受けたことが述べられる。西湖に対する身体感覚は「望郷」の最後に生かされている。

「望郷」の最後で、景林は夢のなかで西湖に帰った。

その霧の存在が彼にはいらだたしかった。彼は西湖の水が見たくてたまらなかった。あのやさしく、柔かく、肌理こまかい、あたたかい感じの水が見たくてたまらなかった。その邪魔をしている霧が怨めしかった。(p.58)

そして、霧が晴れたあと、「曳きずるように長く紋付を着て、それは水の上をしずかにこちらへ渡って来る」(p.58)というように母が現れる。夢のなかで景林が「あ、お母さんっ!」と声を発したと同時に彼は目を覚ました。ここでは、西湖は再び母のイメージと重なった。故郷と母は分かち難く結びつくが、「紋付」を着ている母という設定は、改めて故郷の複雑な実態を物語る。近代以降、故郷への思いは想像の共同体としての「祖国」にすりかえられて考えられるが、「望郷」では、故郷は「祖国」から切断されて語られている。「望郷」には、「祖国」は不在である。

現実では、日本人の小田は戦後早い時期に西湖を再訪することができたが、小説「望郷」では、景林は結局夢のなかでしか西湖、母に再会することができなかった「海を渡れない」人となる。小田はこのような景林の悲哀を描き、中国・日本の境をさまよう知識人の悩みを活写したのである。

本稿では、戦後華僑の帰国状況を踏まえ、東西冷戦の構造に組み込まれた日本・中国・台湾の関係下では華僑の帰国が極めて困難な状況にあったという「望郷」の社会的背

³² 小田巖夫「杭州彷徨」(『新日本文学』第12巻第3号, 1957.3), pp.46-58.

景を新たに明らかにした。その上で、陳舜臣や凌星光などそれぞれ異なる立場に立った華僑に注目し、「帰国」に対する華僑の複雑な思いを指摘した。そして、当時の歴史的背景を踏まえて黄景林の人物設定を分析し、陶晶孫との類似性を指摘した。西湖を訪れることを望みながらも簡単には中国へ帰れない黄景林の境遇は戦後の華僑の状況を彷彿とさせるところがあるが、小田は混血児の設定を用いて黄景林のアイデンティティを揺るがし、ナショナル・アイデンティティに困惑する人々の姿を浮かび上がらせた。

また、「望郷」における西湖のありかたの変化を分析し、女性的な西湖から、アイデンティティに思いを巡らせる地、中日両国の人々の思いが交差する地へと変容する西湖の重層性を明らかにした。とくに、東アジアの知識人が関心を寄せる蘇曼殊を引き合いに出して景林のアイデンティティを語ることの有効性を指摘した。最後に、小田のほかの文章を視野に入れ、彼の一貫した近代知識人の「漂泊」の問題への関心を踏まえ、「望郷」の批評性を論じた。小田は「望郷」を通して人々の西湖との関係性を描き、アイデンティティに揺らぎを持つ知識人の中国へのアプローチの仕方を模索し、西湖を「漂泊」の知識人の精神の拠り所として描いたのである。「望郷」は小田が戦後、「祖国」と距離を置きつつ故郷を望む知識人のアイデンティティを模索した作品である。

【附記】引用文中には、現在の社会的・倫理的規範に鑑みて不適当と考えられる表現もあるが、史料的价值を考慮し、表現を改めることをしなかった。本稿は第7回東アジアと同時代日本語文学フォーラム2019台北大会(2019年10月26日、於台湾・東呉大学)で発表した内容に基づいて執筆したものである。資料を調査するに当たり、東京華僑総会にお世話になった。記して感謝を申しあげたい。なお、本研究はJSPS科学研究助成費(19K20798)の成果の一部である。

参考文献(Bibliography)

(書籍)

- 浅野豊美(2008)『帝国日本の植民地法制——法域統合と帝国秩序』名古屋：名古屋大学出版会。Asano, Toyomi(2008) *Teikoku nihonno shokuminchi hosei: hoiki togoto teikoku chitsujo*. Nagoya: Nagoya daigaku shuppankai.
- 伊豫谷登士翁・平田由美(2014)『「帰郷」の物語/「移動」の語り——戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』東京：平凡社。Iyodani, Toshio・Hirata, Yumi(2014) *Narrating mobilities, narrating "home"-comings*. Tokyo: Heibonsha.
- 小田嶽夫(1940)『北京飄々』東京：竹村書房。Oda, Takeo(1940) *Peking hyohya*. Tokyo: dakemura Shobo.
- 小田嶽夫(1964)『望郷』東京：学習研究社。Oda, Takeo(1964) *Bokyo*. Tokyo: Gakushu kenkyusha.
- 小田嶽夫(1964)『文学青春群像』東京：南北社。Oda, Takeo(1964) *Bungaku seishun gunzo*. Tokyo: Nanbokusha.
- 小田嶽夫(1965)『漂泊の中国作家』東京：現代書房。Oda, Takeo(1965) *Hyohakuno chugoku sakka*. Tokyo: Gendai shobo.
- 小田嶽夫(1975)『郁達夫伝——その詩と愛と日本——』東京：中央公論社。Oda, Takeo(1975) *Iku Tappu den: sonoshi toaito nihon*. Tokyo: chou koronsha.
- 小田嶽夫(2000)『三笠山の月・小田嶽夫作品集』東京：小沢書店。Oda, Takeo(2000) *Mikayamano tsuki: Oda Takeo sakuhin shu*. Tokyo: Kozawa shoten.

大類善啓(2014)『ある華僑の戦後日中関係史——日中交流のはざまに生きた韓慶愈』東京：明石書店。Orui, Yoshihiro(2014) *Aru kakyono sengo nitchu kankeishi: nitchu konyuno hazamani ikita kankeiyo*.Tokyo: Akashi shoten.

陳舜臣(2003)『道半ば』東京：集英社。Chin, Shunshin(2003) *Michi nakaba*.Tokyo: Shueisha.

陳天璽(2005)『無国籍』東京：新潮社。Chin, Tenji(2005) *Stateless*.Tokyo: Shinchosha.

陶晶孫(1944)『陶晶孫日本文集』上海：華中鉄道總裁室弘報室。Tao, Jingsun(1944) *To Shoson nihon bunshu*. Shanghai: Kachu testudo sosaishitsu kohoshitsu.

陶晶孫(1952)『日本への遺書』東京：創元社。Tao, Jingsun(1952) *Nihonhen o isho*.Tokyo: Sogensha.

陶晶孫(1995)『日本への遺書』東京：東方書店。Tao, Jingsun(1995) *Nihonhen o isho*.Tokyo: Toho shoten.

星名宏修(2016)『植民地を読む：「贖」日本人たちの肖像』東京：法政大学出版会。Hoshina, Hironobu(2016) *Shokuminchiwo yomu: "nise" nihonjin tachino shozo*.Tokyo: Hosei daigaku shuppankai.

林麗婷(2019)『中日近代文学における留学生表象——二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に——』大阪：日中言語文化出版社。Lin, Liting(2019) *Chunichi kindai bungakuniokeru ryugakusei hyosho: niju seiki zenhankino chugokujiinno nihon ryugakuwo chushin ni*Osaka: nicchu gengo bunka shuppansha.

安井三吉(2005)『帝国日本と華僑——日本・台湾・朝鮮』東京：青木書店。Yasui, sankichi(2005) *The Japanese Empire and the overseas Chinese in Japan, Taiwan and Korea*.Tokyo: Aoki shoten.

Kakuzo Okakura(1903) *The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*: John Murray.

陶晶孫(1944)『牛骨集』上海：太平書局。Tao, Jingsun(1944) *Niugu ji*.Shanghai: Taiping shuju.

〈雑誌論文〉

国松昭(1994)「『望郷』」東京：『国文学解釈と鑑賞』第64巻第4号, p.54. Kunimatsu, Akira(1994) *Bokyo.Kokubungaku kaishaku to kansyo* Vol.64.No.4, p.54.

中村みどり(2019)「戦時における日中研究者のつながり——松枝茂夫宛陶晶孫関連書簡二通について」東京：『文化論集』第55号, p.248. Nakamura, Midori(2019) *Senjiniokeru nicchu kenkyusha no tsunagari*: Matsueda shigeo ate To Shoson kanren shokan nitsunitsuite.*Bunka ronshu* No.55, p.248

〈雑誌に掲載される文章〉

小田嶽夫(1937)「抗日支那の作家・知識階級人」『文藝春秋』8月号, pp.64-65. Oda, Takeo(1937) *Konichi shinano sakka chishiki kaikyujin*.*Bungei shunju* No.August, pp.64-65.

小田嶽夫(1943)「中国文学者との会合」『新文化』10月号, pp.24-25. Oda Takeo(1943) *Chugoku bungakusha tono kaigo*.*Shin bunka* No.October, pp.24-25.

小田嶽夫(1957)「杭州彷徨」『新日本文学』第12巻第3号, pp.46-58. Oda, Takeo(1957) *Hangzhou hoko*.*Shin nihon bungaku* Vol.12.No.3, pp.46-58.

陶晶孫ほか(1951)「陶晶孫氏を囲む座談会」『三田文学』第41巻第3号, pp.58-71. Tao, Jingsun,etc.(1951) *To Shosonwo kakomu zadankai*.*Mita Bungaku* Vol.41.No.3, pp.58-71.

崔萬秋(1933)「東京交遊記」『新時代月刊』第4巻第4-5合併号, pp.37-40. Cui, Wanqiu(1933) *Dongjing jiaoyouji*.*Xinshidai yuekan* Vol.4.Combined No.4-5, pp.37-40.

郁達夫(1927)「雑誌曼殊的作品」『洪水』第3巻第31期, p.285. Yu, Dafu(1927) *Zatan manshude zuopin*.*Hongshui* Vol.3.No.31, p.285.

張定璜(1923)「Shelley」『創造』第1巻第4期, p.1. Zhang, Dinghuang(1923) *Shelley*.*Chuangzao* Vol.1.No.4, p.1.

〈新聞記事〉

無署名「帰国希望者は早目に手続きを——帰国問題について——」『東京華僑会報』第50号, 1956.6.1. Unsigned.Kikoku kiboshaha hayameni tetsudukiwo: kikoku mondainitsuite.*Tokyo kakyō kaiho*, No.50, 1956.6.1.

無署名「理不尽な日本政府・洪進山ら五名を不法抑留・華僑総会声明を発表」『東京華僑会報』第43号, 1955.11.25. Unsigned. rifujinna nihon seihu koshinzanra gomeiwo fuho yokuryu kakyo sokai seimeiwō happyō. *Tokyo kakyo kaihō*, No.43, 1955.11.25.

潘日榜「祖国への自由渡航望む」『東京華僑会報』第31号, 1954.10.25. Pan Ribang. Sokokuhenō jiyū doko nozomu. *Tokyo kakyo kaihō*, No.31, 1954.10.25.

無署名「最後の東京公演決る」『東京華僑会報』第50号, 1956.6.10. Unsigned. Saigono Tōkyō kōen kimaru. *Tokyo kakyo kaihō*, No.50, 1956.6.10.